

228) ひとりぼっち

ひとりぼっちを鞆に詰めて 日陰の街にやってきたとき
少しばかりの期待と夢と そしてわずかな不安があった
それでも川を見下ろす部屋が とても気に入る荷物を解いた^{ほど}
春3月で私は^{はたち}20歳 あなたと出会う前の日だった

トランペットの大きな音と いびきが少し気になったけど
やさしいあなた愛してたから ひとりぼっちはいつか忘れた
コンビニに帰りの袋の中に あなたの好きなタバコがあった
1DKの窓の下には 疲れた水の川が流れた

あっという間に2年がすぎて 机の上に手紙があった
「一緒に暮らすぼくたちふたり だんだん駄目になってくみたい
緊張感がなくなることで 自分の音が濁ってゆく」と
桜の花がほころびかけて 私の夢は急にしぼんだ

ひとりぼっちを鞆に詰めて 日陰の街を今あとにする
少しばかりの期待と夢と そして大きな挫折があった
それでも川は今日も流れる 愛の暮らしがなかったように
春3月でわたし^{にじゅうに}22歳 ひとりぼっちの鞆が重い

ひとりぼっちの鞆をさげて 日陰の街を今あとにする
春3月でわたし22歳 ひとりぼっちの私にかえる